



七高造士館全景  
 (鹿児島大学中央図書館蔵  
 『七高出てから三十年』より転載)

1786(天明6)年には聖堂を造士館、武芸稽古場を演武館と改名。講義は儒学を中心とし、組頭や城下士、外城士が聴講したほか、学問の志があれば家来や町人、城下士の子どもなど

重豪が曾祖父にもつ島津家28代島津斉彬(11代藩主)は重豪の影響を強く受けたとされる。和漢の学問に加えて洋学も良く学び、当代の蘭学者と積極的に交流した。世界情勢を見据え、日本の国力向上を目指した斉彬は、藩主とあつてすぐに造士館の改革に着手する。1857(安政4)年の、造士館学風矯正の御親書で、修身齐家治国平天下(一身を修めて家庭をととの

え、国を治めて後、天下を平和に導くことができないの道理を研究し、時局に対応でき、国の役に立つ人材の育成を理想に掲げた。さらに、和漢の書物だけでなく西洋の諸書を熟読し、国際情勢に対応できる実学の必要性を強調。藩内だけでは、井の中の蛙(いなかのわが)になるとして、盛んに藩外へ遊学させた。これが後の薩摩藩英国留学生派遣につながる。幕末の動乱期においては、造士館出身の人物が多数活躍したことが知られており、西郷隆盛や大久保利通といった明治維新の立役者も造士館で学んだといわれている。造士館の教育は、日本の近代化の礎も築いたといえよう。

造士館再興の名の下に誕生した第七高等学校造士館。年には第七高等学校造士館が設置され、造士館の名を冠した地方の最高学府が誕生した。公爵島津忠重が政府の高等学校増設計画を知り、基金や建物・図書等を寄附したことがきっかけだった。藩校の流れを汲み、その館号まで受け継いだ旧制高校は全国でも七高たった1校。校舎は島津7万石の本城であった鶴丸城址(現鹿児島歴史資料センター)黎明館に建てられ、学校に係る経費は1905(明治38)年まで島津家の寄附金にあつて賄われた。第七高等学校造士館開校九十五年記念誌「七高は島津家の造士館再興の願いと造士館の建学の精神を受け継いだ学校たち」なのである。



『三国名勝図絵』は、島津家27代島津斉興(10代藩主)が編纂を命じ、薩摩藩領内の地誌や名所をまとめた全60巻の文書。



島津重豪像(鹿児島県歴史資料センター黎明館寄託 玉里島津家蔵)



島津斉彬銀板写真(尚古集成館蔵)

第1部

造士館に遡る236年の歴史

「進取の気風」を引き継ぐ鹿児島大学

創立60周年記念特集

鹿大のルーツを探り  
 未来を展望する

1949(昭和24)年の学制改革により、鹿児島大学が誕生してから60年。鹿大は大学憲章において「進取の気風」にあふれる学生を育成するという姿勢を明確にしてきた。その60年間の歴史の中で教育・研究・社会貢献の分野において、斬新で果敢な取り組みを数多く進めている。今回の特集では鹿大の60年の歴史とともに、鹿大の源流といえる藩学「造士館」や「医学院」、また、新制大学・鹿大の前身となった「第七高等学校造士館」、鹿児島県内の高等教育機関にさかのぼって鹿大の「進取の気風」の源流を見つめ直し、未来へ向けての新たな指針を探る。

「進取の気性」旺盛な重豪が創設した藩学造士館

鹿大の起源は、江戸時代に島津家25代島津重豪(8代藩主)が創設した藩学「造士館」にさかのぼる。重豪は、蘭学といわれるほど西洋の文化に強い関心を示し、中国語も堪能で、英邁蘭達にして進取の気性も旺盛(島津修公、島津歴代略記)であった。暦学の研究や天体観測を行う明時館(天文館)の創設や、農学百科全書「成形成形図説」をはじめとする各種書籍の編纂・出版といった文化事業にも積極的に、薩摩藩における文化発展の礎を築いた。1773(安永2)年、重豪は教育

「造士館再興」の名の下に誕生した第七高等学校造士館

藩学造士館は1871(明治4)年に廃校となり、造士館の名を持つ学校は消えた。1884(明治17)年、西南戦争を経て有志若者を数多く失った鹿児島の現状を憂えた旧薩摩藩主公爵島津忠重が教育機関の設置を求めた多額の寄附を行った。これにより翌年3月、県立中学造士館が設置された。その後、度重なる学制の変更に翻弄されながらも、1901(明治34)

# 鹿児島大学の 成り立ち

## 法文学部・理学部

島津家の寄附にあて誕生した第七高等学校造士館は、法文学部理学部の前身である。帝国大学の予備教育を目的とし、選抜されたエリートが進む地方の最高学府であり、合格率は1%ほどだった。七高生は地域の人々から尊敬の念を持って「七高さん」と呼ばれ、親しまれていた。1年次には寮に入る事が決められており、先輩や後輩、寮同士で切磋琢磨しながら勉学に励み、夜は寮生同士で議論を闘わせた。寮生活は人間形成の場でもあった。そうした環境の七高からは20世紀に活躍する人物が輩出された。外務大臣を務めた東郷茂徳は七高期生で文系のトブであった。他にも政財界、法曹界、文化関係者などさまざまな分野で日本の戦中戦後をリードした人物に七高出身者が数多く見られる。

七高は1949(昭和24)年に鹿児島大学文学部(後の法文学部と理学部)となり、1950(昭和25)年にその幕を下ろした。その50年の歴史は激動の20世紀の歴史と重なる。



数学の授業風景(鹿児島大学中央図書館蔵『七高一わがふるさと』より転載)



七高寮生日誌(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵) 昭和17年度第三学期のもの。卒業間際の心境が綴られている



七高生のレポート(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵) 「海国兵談」西洋紀聞について書かれている

## 医学部

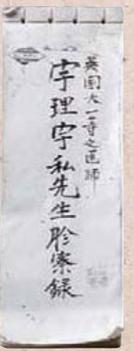
80歳を超えて長崎出島のオランダ商館医シムホルトと会談を行ったこともある島津重豪は1774(安永3)年、医学部を創設した。この医學院が現在の医学部の源流である。

明治時代になると、「医学校」が設立され、英国人が校長を務めた。それが英国公使館付きの医官ウィリアム・ウイリスであった。ウイリスは生麦事件や鳥羽伏見の戦いにおいて敵味方の区別なく負傷兵を治療するというヒューマニズムを発揮。また、薩摩藩の医師たちの指導を通じて、薩摩藩の信頼を得ていた。そのウイリスの英国医学の知見を鹿児島島の医学の発展に役立ててもらいたいと考えた西郷隆盛や大山巖らがウイリスの招聘に動き、1870(明治3)年、



ウィリアム・ウイリス(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵)

診察録(鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵) ウイリスの診察録と思われるものの写し。患者名と処方した薬が書かれている



医学院跡(鹿児島市照国町)

大正四年十月開校第十四回紀年祭歌「北辰斜に」歌碑と七高生久遠の像(黎明館敷地内)



## column

### 歌い継がれた 紀年祭歌「北辰斜に」

七高では毎年10月25日に開校記念祭が行われ、年ごとに紀年祭歌がつけられてきた。中でも七高生に愛され、歌い継がれてきた歌と言えば、大正四年十月開校第十四回紀年祭歌「北辰斜に」(築田勝三郎作詞、須川政太郎作曲)が真っ先に挙げられる。「北辰」とは北極星を指す。鹿児島市から北天の仰角31度36分の位置に見えることから「北辰斜」は七高が北極星が低く斜めに見えるほど南の場所にあることを意味する。作詞者の築田勝三郎は、1912(大正元)年に七高第二部甲類に入学したが病を得て退学、夭折した。

今でも「北辰斜に」は鹿大の卒業式や入学式などで合唱団によって歌われている。また、七高を舞台にした映画「北辰斜にさすところ」では、七高生がチームをしながらこの歌を高歌する場面を観ることができる。

## 教育学部

教育学部の前身は鹿児島師範学校と鹿児島青年師範学校である。さらにその源流をたどれば、1875(明治8)年に設置された小学校校授業講習所や小学校正則講習所にまでさかのぼる。これらの学校が時代とともに改称変遷を重ねながら、鹿児島師範養成機関として多数の教育人を世に送り出した。1943(昭和18)年には鹿児島師範学校が、翌年には鹿児島青年師範学校が誕生した。女性として初めて帝国大学入学を果たし、日本初の女性農学博士となった丹下梅子は師範学校の卒業生である。1949(昭和24)年、師範学校と青年師範学校が鹿児島大学教育学部となった。



鹿児島師範学校(鹿児島市武町)

## 工学部

工学部の前身は1945(昭和20)年に設置された鹿児島県立工業専門学校である。1943(昭和18)年の県議会において工事設置の動議が出されたことをきっかけに、岩崎産業株式社長の岩崎與八郎氏の寄附があり、設置が実現。全国からの志願者は6千名に上った。戦災による教室の焼失などもあり開校当初は苦労が絶えなかったが、1949(昭和23)年に初めての卒業生225人を送り出した。同校は翌年、新制大学として鹿児島県立大学工学部へと生まれ変わった後、1955(昭和30)年の国立移行により鹿児島大学工学部となった。



工事時代の化学工業科実験室(昭和22年頃)

## 水産学部

水産学部の前身は鹿児島水産専門学校であるが、その源流をたどると1908(明治41)年、鹿児島市山下町に設置された鹿児島県立商船学校に行き当たる。同校は改称や国立移行を経て1946(昭和21)年に廃校となり、代わり同年、全国で2番目の水産専門学校として国立鹿児島水産専門学校が設置された。日本再建への希望をもち、先生と学生が同行者としても学ぶという雰囲気であったといふ。鹿児島大学水産学部50周年記念誌。同校は1949(昭和24)年、鹿児島大学水産学部となった。



鹿児島水産専門学校

## 農学部

農学部の前身は1908(明治41)年設置の鹿児島高等農林学校以下、鹿高農である。鹿高農は日本最初の農業教育機関であった盛岡高等農林学校に次ぎ、全国で2番目に設置された。鹿児島は日本の南端にあつて暖地なので熱帯方面の植物の栽培、研究を目的に「牧野伸顯 回録(下)」としていた。

初代校長には、盛岡高農の初代校長、玉利喜造が招聘された。玉利は鹿児島出身で、日本の農学博士第1号となった人物。日本の農学の始祖の人といわれ、農学者として初めての勲任貴族院議員にもなった。

鹿高農では実行力のある人物の育成を目指し、実験・実習に重きを置いた。そのため、教室だけでなく農場を教養の



鹿児島大学総合研究博物館常設展示室は鹿高農の図書館書庫として昭和3(1928)年に建設。当時の建物として現在まで残る唯一の建物で国の登録有形文化財に登録されている

場所として位置づけ、理論家だけでなく、農林業を本当に理解し、実際に体験した実家をつくる「教育を行な」玉利喜造先生伝)。

鹿高農はその後、鹿児島農林専門学校と改称し、1949(昭和24)年に鹿児島大学農学部が誕生した。鹿児島高等農林学校の広大な敷地は、現在の郡元キャンパスとなっている。



授業風景



玉利喜造像(朝倉文夫制作)。台座には第二次世界大戦時の弾痕が残る



鹿児島高等農林学校講堂